

多くの寄贈雑誌の中、四国から出る「×光」が机上にあつたので拝見する。「満州事変に絡まる奇談三つ」と最初に出されている。その内容は、一、奉公袋に現われた神馬の毛、二、主人の身を案じた愛馬の霊、三、身代わりになつた鎮守の護符、というのだ。読んで私は吹き出した。堂々仏教中の仏教、浄土真宗を宣説しようとするこの雑誌が、まるで迷信宣伝だ。これが巻頭にのせてあるようでは、いかにお念仏のありがたさが出されてあつても、十九願二十願の世界であることに間違いない。化身土巻を再三お読みになつたらいかが。

南嶺の戦いの時、岡野一等兵が弾丸にやられたと思つて昏倒した。気がついて見ると、腹巻に入れた八幡神社のお守りが身代わりになつて、その真つただ中をうちぬかれていたというのだ。これでは満州や上海で命を捨てた勇士たちは浮ばれない。かかる思想、およびその思想伝道家こそ、正法の剣に血ぬるべきわれらの敵国である。

こんな科学的無知の迷信狂が、さらに、盲目的神秘の上に躍つて念仏する。阿片だと言われても仕方がない。親鸞聖人の「不可称、不可説、不可思議の信」とは似ても似つかないものだ。

いつかの「中外」の記事だつたと思う。万年筆に弾丸があたつて命拾ひした兵士がある。本願寺のお名号でなかつてよかつた。迷信が一つ増すところだつたと。ところが、さる高等女学校から出る堂々たる仏教雑誌に、お名号に弾丸があたつて、仏に救われたお不思議が載つていた。私はその時にも苦々しいことに思った。

なぜ草木は緑色であるか。科学者は緑であることの様子を微に入り細に入つて説明する。いよいよわかればわかるだけ、ほんとの不思議が増す。こんな世界を批判的神秘とよぶ。しかしそれは不可解ではない。人間が太古未開の庶物崇拜アニミズムの時代には、因果関係がわからぬために、何でもかでも不思議であつた。何でもかでも恐しかった。その恐しいものや不思議なものを神にした。多神教がそれである。馬の毛が奉公袋にあつたの、お守りが身代わりになつたの、こんなことを信じている頭は、太古の野蛮人と大差はない。もっと積尊の智慧の世界を知つたがいい。一定の強さと角度をもつた弾丸が人体に入つてあたる。それは物理的法則に支配される機械的因果関係よりほか、何でもないのである。こんな記事を載せて、恥とも思わぬ仏教徒？からどうにかせねば、仏教が減ぶのも当然だ。

命拾ひして感極まつて鎮守の森を拝むような、ご自分一人に都合のいいご信心を捨て、お守を捨てて、笑つて死線を超えて生きゆく絶対信だ。仏は智慧光……自覚よりほかの天地に顕現せず。

馬鹿者どもの世界に姓名判断というのがある。「清永」とは清く永く生きるということ、あなたはどうもその家柄には相応しない。住岡狂風とは、岡に住んで風に狂う、いや大変な勢いで……運命論者の群が、姓名判断博士を祭りあげる。近頃もある葬式の時、人もあろうに禅僧が、新仏はお名前は「朝代」か、なるほどご短命ですな、このお名ではと、食事中、皆の姓名判断をやっていたとのこと、この禅僧こそ、仏教の面をかぶる外道なのだ。

ある大学出が、「子供があいついで病気になるので、これではもう科学の力ではないか」と思いました、近頃はお大師さんを信仰しています。」と恥ずかしそうにもなく言っている。超科学と反科学、超因果と反因果とを間違えたあほうだ。仏教はそんな所にはない。

社会環境の行きづまった今は、特にこうした、盲目的神秘をかつぎ出して俗衆をひきつけるにいい時だ。だが、われらは静かに正法を念じよう。